

平成 21 年 3 月 31 日現在

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2006 年～2008 年

課題番号：18592464

研究課題名（和文） 高齢者の排泄ケアプログラムの研究開発と効果測定

研究課題名（英文） Research for aged peoples care with urination trouble

研究代表者

大竹 登志子(OHTAKE TOSHIKO)

財団法人東京都高齢者研究・福祉振興財団・東京都老人総合研究所・研究員

研究者番号：30213755

研究成果の概要：

高齢者の排尿障害に対して、現状では泌尿器科あるいは婦人科外来で対応しているが、まだ十分とはいえない。そこで当事者本人がアクセス可能な「さわやか(排尿)相談室」を導入し、その効果をみた。成果として、

1) 排尿状態の現状と本人の理解度と日常生活実態が分かりやすくし、高齢者が記入しやすい冊子「さわやか日誌(排尿日誌)」と「高齢者排尿問題解決問診表(老研・大竹版)」を作成した。

2) 個別の面談ケアにより、高齢者の排尿問題解決に面談ケア方法という手法が開発され、このシステムを東京都老人医療センターに導入した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	1,200,000	0	1,200,000
2007 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2008 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
総計	3,500,000	690,000	4,190,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・地域・老年看護学

キーワード：高齢者、排泄ケア、排尿問題、ケア方法の開発、排尿ケア問診表、口腔ケア

## 1. 研究開始当初の背景

研究背景(1)

2005 年 5 月、東京都老人医療センター泌尿器科村山猛男医師と副院長森眞由美副院長から「高齢者の排尿問題解決、

相談室」窓口の開設を依頼された。長年高齢者医療に従事してきた臨床医師らが排尿問題は、泌尿器専門領域だけでは十分ではないという判断であり、長年の口腔ケアの研究をしてきた大竹研究員が指名され、2005 年 9

月「さわやか排泄相談」がスタートした。センター内にポスター（資料 1）を掲示し、電話で相談，希望者は予約制で面談を行った。



(資料 1)

## 研究背景 (2)

臨床のフィールドとなった東京都老人医療センターは高齢者専門の医療機関である。本研究は、医師・看護師らは勿論、電話交換、検査課、リハビリ科、各科のスタッフら全職員の協力なしでは不可能な臨床研究であった。

## 2. 研究の目的

高齢者の排尿に関する主訴を把握し、排尿問題解決に相談と面談ケアを行い、その効果を見る。

## 3. 研究の方法

### (1) 臨床経過 1

相談の電話を受けながら、100名の相談を受けた段階で、電話で聞いておきたい情報、また面談中に触れた内容をまとめて「排尿日誌(資料 2)」「排尿問題解決問診票(資料 3)」を作成した。2年目に入り、心理社会精神的な打つスケール GDS (Geriatric Depression スケール) を挿入した。

### (2) 臨床経過 2: 2005 年から 2008 年 3 月の 31 ヶ月間の面談ケアの実施と面談ケアの効果

患者一人あたり約一時間の予約制で面談をし、

排尿症状と生活全体の把握をしながら生活指導、必要に応じてカウンセリングを行った。さらに排尿検査と医師の診断が必要と判断した患者には、泌尿器科医師あるいは婦人科、あるいは神経内科に紹介した。また逆に医師・看護師(循環器、内分泌、腎臓内科、精神科医師など)からの紹介もあった。

### (3) 臨床経過 3: 外来に「さわやか相談室」

#### システム導入

2007 年から 2008 年の一年間は、「さわやか排尿相談室」を東京都老人医療センター外来に引きつづ体制を考え、外来看護師と泌尿器科医師も含めて事例検討を行い総合的に討議し、その結果、2008.4 月から「さわやか(排尿ケア)相談室」のシステムを東京都医療センターに導入した。



(資料 2)





排尿ノート記入の効果 (自由回答)

記入に関する効果を聞いたところ、多い順にあげると、30名が自分のトイレ時間と量が分かり、しっかり尿のことを考えるようになった。5名は気分によってトイレに行くパターンが変わることが分かった、と答えている。

電話・面談における満足感 (5段階)

5段階で聞いたところ、大変満足が30名、約2割、満足が104名、約6割、あわせて約8割我満足と答え、なんとも言えないとこ答えた人は47名、約2割いた。不満と答えた人はいなかった。

気分的な変化 (5段階)

5段階で聞いたところ、とてもよくなった人は15名、一割で、少し良くなった人は129名、9割であった。

**考察：**排尿の電話相談と面談ケアの効果は、患者側からは、気分的に落ち着いた、安心した、聞いてもらえて満足したということで、どのような内容の生活指導を受けたかという内容については覚えていないのか、重要視されていなかった。ということで、面談の効果であり、排尿症状の理解と、生活状況と心理的な問題への対応に重点をおいたカウンセリングを含めた個別面談そのものが評価されたということである。

この面談時間で、相談員に分かってもらえたということで、気分的に落ちついてから、記入可能な人は排尿日誌に記録することで、自分の生活を客観的に見直す機会となったことが一番の効果に綱あったといえよう。その上で、医療を必要とした人は、治療を受ける前に、困っていることや生活状況を伝えてから、納得して治療・ケアを受ける心構えができるということである。排尿問題を解決しようと思ったことが、自分の生活全体を見直し、医療のかかり方を自分から主体性をもっ

ていった、ということが排尿症状の改善につながったと言ってもよいだろう。

また、医療者側にとっては、治療前に患者・家族の生活全体を把握した上で臨床の治療とケアに専念できること、治療のフローが確立されたこと、現在の外来診療では、患者並びに家族の排尿問題についての悩みや訴えたいこと、また治療に対する希望、要望などに満足いだけ時間がとれたということである。

ここでは面談ケアの効果を評価したが、排尿に関連する服薬の効果と副作用については研究課題として残されている。

**結語：**高齢者の排尿症状の改善・治療にとって、排尿症状の観察と心理状態を含めた生活状況の把握に基づいた面談が重要である。看護師のさらなるスキルアップを要求されている。

5. 主な発表論文等  
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 4件)

大竹登志子, 菊地和則, 高齢者の排尿問題とチーム医療, 第13回板橋区医師会医学会, P78, 2008, 査読無

大竹登志子, 菊地和則, 前川佳史, 石井賢二, 高齢者の排尿問題解決手法の新しい福祉医医療モデルの試行とその効果, 平成20年度東京都福祉保健医療学会誌, p145-146, 2008, 査読無

大竹登志子, 菊地和則, 前川佳史, 粕谷豊, 村山猛男, 排尿ケア相談室と面談ケアシステム導入の効果と今後の課題(2), 第20回日本老年泌尿器科学会, p91, 2007, 査読無

大竹登志子, 菊地和則, 前川佳史, 粕谷豊, 村山猛男, 排尿ケア相談室と面談ケアシ

STEM導入の効果と今後の課題(1),第19回日本老年泌尿器科学会,p100,2006,査読無

〔学会発表〕(計 1件)

大竹登志子,菊地和則,高齢者の排尿問題とチーム医療,第13回板橋区医師会医学会,2008年9月6日・7日,板橋区立グリーンホール

〔図書〕(計 1件)

大竹登志子,菊地和則,東京都老人総合研究所,「さわやか健康管理:口腔ケアから排尿ケアまで」,2008,16

〔その他:アウトリーチ活動〕(計 8件)

大竹登志子,「高齢者の口腔ケアと排泄ケア」,遠藤ボランティアグループ主催,ボランティア対象,杉並区役所会議室,2008.11.21

大竹登志子,「排泄ケア」,茨城県社会福祉協議会主催,看護師対象,社会福祉施設職員研修,2008.11.20

大竹登志子,「口腔ケアと排泄ケアその実習」東村山市保健推進会主催,東村山市保健推進委員対象,東村山市立中央公民館,2008.10.4

大竹登志子,「高齢者の排尿ケアとその方法」,中野区 NPO21 世紀を支えあう会主催,2008.9.20

大竹登志子,「高齢者老人大学」,深川老人福祉センター,2008.9.16

大竹登志子,「高齢者の排尿メカニズムと排尿ケア」,萩山市高齢者福祉ボランティアグループ,2008.2.16

大竹登志子,「高齢者の排尿メカニズムと排尿ケア」,萩山市いこいの家

大竹登志子,早稲田大学理工学部講義「口腔ケア」

「排泄ケア」2007年度、2008年度

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

大竹 登志子(OHTAKE TOSHIKO)

財団法人東京都高齢者研究・福祉振興財団・東京都老人総合研究所・研究員

研究者番号:30213755

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

菊池 和則(KIKUCHI KAZUNORI)

財団法人東京都高齢者研究・福祉振興財団・東京都老人総合研究所・研究助手

研究者番号:00271560

前川 佳史(MAEKAWA YOSHIYUKI)

財団法人東京都高齢者研究・福祉振興財団・東京都老人総合研究所・研究助手

研究者番号:50260302

石井 賢二(ISHII KENJI)

財団法人東京都高齢者研究・福祉振興財団・東京都老人総合研究所・研究副部長

研究者番号:10231135